

## 近世の雅楽譜における記譜の特徴と系統に関する研究

### －奈良方の笛譜を中心に

---

代表研究者 出口 実紀

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 非常勤講師

#### 研究要旨

代々、雅楽を専門として従事する楽人たちは、京都(御所)、奈良(興福寺)、大坂(四天王寺)の三地域に本拠地を置き、雅楽の伝承を担ってきた。楽人の家筋は「楽家」と呼ばれ、各楽家は「楽所」と呼ばれる組織を形成し、三地域の楽所を合わせて「三方楽所」という。各楽家は、それぞれの地域で雅楽の演奏活動に従事するとともに、家ごとに決められた楽器および舞を伝承してきた。しかし明治に入ると、京都、奈良、大坂の三方の楽人は東京で統合されて「宮内省式部職楽部」となった。それに伴い、各地でそれぞれに伝承されていた演奏を統一する必要性が生じ、明治9年(1876)と明治21年(1888)に楽譜や曲目の撰定作業がおこなわれた。そして完成したのが、現在の雅楽譜の規範となっている「明治撰定譜」である。

三方楽所の統一に伴って作成された「明治撰定譜」は、当時の宮内省式部職楽部に所属する伶人(楽人)達によって撰定作業がおこなわれたが、江戸時代、三つの地域でそれぞれに伝承されていた演奏および楽譜については、どの家の譜が採用されたのかという具体的な内容についてはこれまで未詳であった。それを明らかにするためには、各楽器を主業とする楽家の楽譜を比較・照合し、江戸時代の楽譜の系統をみていくことが必要である。そこで本研究では、雅楽の横笛を主業としていた家の笛譜および文献から、江戸時代の三方楽所(京都・奈良・大坂)における笛譜の記譜を分析し、現行雅楽の規範となっている「明治撰定譜」の成立背景を明らかにすることを目的とする。

江戸時代、横笛を主業とする家は、京都方の山井(大神)家、多家、奈良方の芝家、上家、奥家、天王寺方の岡家であった。天王寺方の笛譜についてはすでに研究を進めていた為、本研究課題では奈良方を対象として全国各地に点在する資料(笛譜)の所蔵調査、収集をおこない、笛譜の記譜の分析を継続中である。今回の所蔵調査によって新たに江戸時代の譜本類を複数確認することができ、「明治撰定譜」の成立を明らかにするための基礎資料が入手できた事は大きな収穫であった。また、近世における雅楽譜の多様化や需要といった新たな研究課題も見つかり、本研究の成果を活用した研究を今後進めていく。

---